

インターセクショナリティの視点で見る日本帝国体制下の戦時性暴力問題 (4)

——語りが内包する多元的視点への注目・元満蒙開拓団の女性の事例から——

京都大学 山本めゆ

1. 目的

2020 年開催の ISA フォーラムの大会テーマにも掲げられているインターセクショナリティ（交差性・輻輳性）とは、社会を分断する多数の軸の集合によって社会的不平等が生成・維持されるという認識のもと、人びとの経験をジェンダー・民族・人種・階級・植民地支配・障害といった多様な軸の重なり合いとして理解する分析視角である。ダイバーシティ研究における鍵概念のひとつであり、1990 年代の北米で生起した第 3 波フェミニズムや今日のジェンダー研究においても重要視されてきた（Vertovec 2014, 東 2018）。日本においても在留外国人の増加と多様化に伴い、さらなる階層分化も予想され、近い将来この概念はいつそう関心を集めると見込まれている。しかし、戦時性暴力をめぐる研究において、この視角の重要性は繰り返し指摘されながらも、じゅうぶんに受容されてこなかった。そこで本報告では、引揚女性の性暴力被害をめぐる報道や学術研究を題材に、戦時性暴力研究においてインターセクショナリティという視角を主流化することの必要と意義を検討する。

2. 方法

満蒙開拓平和記念館において実施された X 子さんの講演記録について、戦時性暴力被害に関する語りとそれが語られた文脈に注意しながら検討を行う。X 子さんは Z 開拓団の一員として満洲に渡った経験を持つ。2013 年に記念館に招かれた X 子さんは、満蒙開拓の語り部として聴衆を前に自身の半生を語り、2016 年に他界している。日本においてはほとんど先例がない戦時性暴力被害の経験を含んだ語りであることから、すでに複数の報道・学術論文のなかで紹介されており、今回はこれらについても検討した。

3. 結果

第一に、X 子さんは自身の性暴力被害とともに、満蒙開拓や分村移民政策、開拓団の入植に伴う土地収奪等に対する批判や反省にも言及していた。第二に、これまでの報道や学術論文においても X 子さんの講演の意義は示されてきたが、性暴力被害そのものに言及した箇所のみ引用され、それ以外はほぼ等閑視されてきたことも確認された。X 子さんを紹介する記者や調査者が X 子さんを性暴力被害という単一の属性に還元してきたために、X 子さんの語りが内包していた多元的視点は掬い上げられずにきたと考えられる。

4. 考察

近年では「保守」系言論界も引揚時の性暴力被害に強い関心を寄せている。この被害が歴史修正主義の資源となるような言説的土壌は、満洲や朝鮮半島から帰還した日本人女性と、日本軍によって性暴力被害者となった植民地・占領地の女性を、ともに「戦時性暴力被害者」という同一カテゴリーで論じるようなアプローチによって醸成されてきたともいえる。それはまた、X 子さんの語りを「性暴力被害の語り」に切り縮めることにもつながってきた。戦時性暴力研究においてもインターセクショナリティに留意しながら検討することが求められよう。

Vertovec, S., 2014, "Introduction: Formulating Diversity Studies", *Routledge International Handbook of Diversity Studies*, London: Routledge.

田中東子, 2018 「第三波フェミニズム」『ジェンダー史学』14: 123-130.